



大本山永平寺



秋上山あきじょうざん

永平寺では、修行を志して来る者を年じゅう迎えているわけではありません。

春の一定期間と秋の一定期間に限りその年の新たな修行僧を迎えます。

割合としては春には上山する修行僧が多いのですが、毎年この十月の上旬にも少なからず修行僧が上山してきます。

さて、当たり前のことですが、後輩が入門してくるからこそ先輩になれるのです。逆に言えば後輩が入門しないと先輩にはいつまでたってもなれません。

「行捨ぎょうしやく」という言葉があります。

「一年、二年、三年と修行を積んだ！」と威張り、先輩風を吹かせ偉そうになつてはいけません。

行を捨てるのではなく、修行を積んだ自分は立派なんだという「慢心まんしん」を捨てるということです。

「先輩が来たお蔭で先輩にならせていただいた」という気持ちがあれば「慢心」に侵されることなく修行が続けられることでしょう。

半年近く起床時刻が午前三時半でしたが、中旬より午前四時に変わります。涼しい季節になり起居しやすくなった永平寺です。



大本山總持寺



「檀信徒の集い」と「つるみ夢ひろば」

十月二日から冬安居制中に入り、首座和尚を中心に来年正月まで百日間の集中修行が始まります。

また、十二日から十五日までは御開山瑩山禪師・二祖峨山禪師（お二方併せて御両尊と申します）を偲び、「御両尊御征忌会」が営まれます。この期間には全国から選ばれた焼香師さまが禪師さまの御代理として法要の導師を勤められ、随喜の御寺院・檀信徒の方がたも大勢参集して報恩の誠が捧げられます。

十一月二〜三日には一泊で第一回「本山檀信徒の集い」が開催されます。總持寺は曹洞宗の大本山であると同時に多くの檀信徒を擁する寺院でもあります。本山檀信徒にとって江川禪師さまは「菩提寺の御住職」と同時に「曹洞宗大本山の貫首」でもありますので、なかなか接することが難しく、この機会に禪師さまと親しくお会いする時間を設けました。二日夜にはテレビや舞台で活躍中の女優・五代路子さん（本山篤信者）から御講演をいただきます。

十一月三日には、緑の木立に囲まれた広大な境内を開放しての「つるみ夢ひろば in 總持寺」が開催されます。これは地元鶴見の文化歴史に親しみ東日本大震災の被災地と絆を結ぶことをテーマに開かれるフェスタです。是非とも読者の皆さまにもお運びくださいますよう御案内申し上げます。

選・村松五灰子

思ひ切るべきことならん髪洗ふ

東京郡 長谷川 瞳

評 その拘泥に、その逡巡のわが心を論し叱咤。まとわるものを流すべく髪を洗う。決断は迫られている。心象表現の無駄の無さが句を引き締めている。

包丁の研ぎ師来てをりかたつむり

秋田県 鈴木 ゆう

評 いまではあまり見かけなくなった包丁研ぎ師。ご当地では今も家々を訪れて、切れ味の落ちた包丁を研いでくれるようだ。お庭の木陰で世間話などしながら。「かたつむり」で落ち着いた一日のひとひ一光景が浮かぶ。

- ◆台風のやや遠のきて眠りけり 三重県 野呂 と志
- ◆乳母車ふはふはの足出て真夏 埼玉県 日尾野安子
- ◆朝蟬の鳴き出し畑を引き上げぬ 広島県 岡村 憲諒
- ◆切火花祭男を浄め出す 東京都 伊奈 三郎
- ◆氷菓なめ真水のやうな女の子 大阪府 柏原 才子
- ◆筆圧の軽き写経や夜の秋 山梨県 矢野 伸行
- ◆逃げ込みしところ仏壇昼の蜘蛛 静岡県 渥美ふき子
- ◆遠の日をつなく間のあり忘れ草 宮城県 小西 力子
- ◆一隅の肩身の狭き余り苗 大分県 武石富美子
- ◆浴衣着る母の小さき立ち姿 三重県 山下 利夫

*選者吟

この紅葉いま散りたての拾ひたて

五灰子

*作句小見

「選は、創作なり」と虚子は語ります。心して選をさせていだいていきます。毎号常連の方、新たに投句参加される方、たくさん応募があります。胸の痛むことは毎回佳句・秀句でありながら限られた枠に掲載できず申し訳なく思います。引き続きご投句されますようお願い致します。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

亡き母の作りし梅酒を飲み干して少年のご
と淋しくなりぬ
北海道 池田 雨郷

評 亡き母上が作り置いた梅酒を少しずつ味わっていたが、
それも飲み干し、母を失った悲しみを新たにする作者。下句
の手放しの悲しみの吐露に、実感がこもり心を打つ。

はずれたる戸障子に木っ端はめ込みて余震
に怯えおびえ老いゆく
岩手県 阿部 熙子

評 大地震ではずれた戸障子への応急処置の無造作な描写が、
切迫感をつのらせる。命が助かっただけでも僥倖(きやうじやう)という時期
を経て、このまま怯えながら老いてゆくのかという嘆きは深
い。一日も早い復興を願うばかりである。

◆我が庭に螢一匹迷ひ来て父かと思ふ母かと思ふ

鳥根原 横山 橐吾
◆ただいまと転げることく四歳児てんとう虫のみやげかざ
山形県 多田 さよ

◆朝顔を数えて足らぬ子の指に母も指貸す朝のひととき

新潟県 星野 三興

◆故郷は深山つばめの来るところ今も子育て続きいるらん

山口県 高杉 展子
◆梅雨の晴れ間車椅子にて散歩する小径のあじさい今日の
福とす 静岡県 土屋 君江

◆今年から地下足袋要らぬと決めたるに春近づけば心変り
す 秋田県 須藤 哲平

◆心地よきこの薫風も現世の過ぎゆくものひとつであり
ぬ 北海道 石森美恵子

◆ゆるやかに下る坂道図書館の大樹のこぶし今日は満開
山口県 中井 清子

◆父母妻のねむる墓原梅雨の日に八十路の無事を告げて墓
去る 三重県 小阪 晋

◆薫風にまわり囲まれ深呼吸大きく吸いて大きく吐いて
兵庫県 河本佐知代

*選者詠

つぎつぎと被爆の事例追いかけてくる音声ガ
イドのイヤホンははずす
ちづ

*作歌小見

今夏、原爆資料館を訪れました。原爆を投下された広島の人びとがどんな苦しみを味わったか遅ればせながら、原爆の再稼働で揺れるこの時期、原点に戻って考えたいと思っただけです。その悲惨さは耳に目に溢れ、整理しかねる有り様です。